

「歴史観の形成」という試み

——高等教育における一般教養としての歴史学の意義——

山崎有恒

はじめに

立命館大学文学部において一般教養科目「歴史観の形成」を担当して、はや10年を迎えようとしている。この間、高等教育である大学において、特に歴史学を専門としているわけでもない一般の学生に対して、歴史学の何をなぜ伝えるべきなのか、その意義と重要性について、またそれをどのような題材を通じてどのように伝えるべきか模索し続けてきた。本稿はそうした10年に及ぶ試行錯誤の中で一応完成を見るに至った「歴史観の形成」という科目について、この機会にその内容とコンセプトを紹介しようというものである。

このような形で高等教育の実践例を紹介しようとするに至った契機について最初に述べておきたい。歴史はかつて社会と密接に結び付き、為政者にとっては必須の学問、教養であった。中国の歴代王朝の皇帝のそばには、必ず歴史学者がおり、自らの王朝が天命を失わないように、過去の王朝の失敗事例を踏まえつつ、アドバイスを送っていたという。そのような時代には歴史学の社会的意義や必要性、重要性が疑われることもなかった。しかし時は流れ、歴史という学問は今や完全に趣味の学問、社会にとって不要不急の学問と見られるようになってしまった。そして受験生にとっては単に受験のための暗記科目とみなされるようになった。そんな状況下で、受験から解放された大学生に、どうやって歴史学の重要性、社会的有用性を伝えていくべきなのか、歴史学の専門家になるわけではない一般の学生たちに（そして間違いなく将来はこの国を様々な形で担っていくことになる若者たちに）、歴史を学ぶことの重要性をどう伝えていくべきなのか。

おそらく多くの大学で、歴史学の教員たちによって同様の課題、意識に由来する教育実践の試みが積み重ねられていることだろうと思う。しかし歴史学の学問的成果が論文の形で公刊され、学界で広く共有されていくのに対し、こうした歴史教育の実践例は、それぞれの教場の中に留まり、その成果が広く共有されることは珍しい。しかしこうした教育実践、すなわち現代社会において、歴史学が存在する意義をどのように設定し、それをどのようにわかりやすい形で若者に伝えていくかは、単に歴史学の研究を進展させ、論文を量産する以上に、歴史学の未来にとって重要な取り組みであると考えられる。もしそうであるならば、その実践例をこのような形で紀要に掲載することにも一定の意義があるのではないかと筆者は思う。

こうした意識に基づき、本稿は2016年度に立命館大学文学部で開講された「歴史観の形成」という教養科目について、そのコンセプトと具体的な内容を紹介していきたい。

1. 現代社会を生きる若者にとって歴史はなぜ必要なのか。

平成 20 年代の大学生に共通してみられるのは、現代社会と自分の将来についての漫然とした不安である。日本という国の高度経済成長は完全にストップし、彼らが生まれた瞬間から日本は長期的な不況の中にあり、彼らは一度として日本の良き時代を経験したことがない。また良い大学を出れば良い就職先があるという学歴社会の王道も必ずしも機能しなくなっているが、ではかわりに何を身につければよいのかもわからないという混迷の中に彼らはいる。そういう状況下で漂う閉塞感(世の中は決して変わらない、良くなれないという感覚)とそれに対する絶望感にも近い諦め、といったあたりが現今の大学生の一般的な感覚とってよいように思われる。

そういう現状の中で、歴史を学ぶことにはどのような意義があるのか。筆者が考える意義とはおよそ次の二つに集約される。

第一に、今の世の中で「絶対」とされている「常識」が、実はそんなに古い伝統と歴史をもつわけではなく、比較的最近形成されたものが少なくないことを知ることができるということである。例えば今から約 160 年ほど前、江戸時代の人々は、今とは全く異なる常識、価値観の中で生きていた。現代日本社会にはびこる常識や価値観…そしてそれこそが若者を取り巻く、世の中は変えられない、もはやどうしようもないという閉塞感や絶望感の根源なのだが…が、実は高々 160 年ほどの歴史しか持たないことを知れば、少しは肩が軽くなるだろう。また効用はそれだけではない。現在とは大きく異なる江戸時代人の価値観、その中には現在のわれわれが失ってしまった貴重で有用なものが、意外に多く詰まっている。明治時代の先祖たちは、そうした江戸時代の「良きもの」を捨てて、一から西欧型の国家形成に取り組んだのであるが(そしてそれは植民地化の危機に瀕していたその時代の人々からすれば、他に選択肢なき道であったとも思うが)、現代になってそうした西欧化、近代化の歴史を振り返ってみる時、私達は得たものの大きさとともに失ったものの大きさにも同時に気付くこととなる。つまり私達は必ずしも最良の道を歩んできたわけではなく、何かを得るために何かを捨てたにすぎないのであって、そうであるならばその結果として誕生した現代社会を必要以上に賛美することはない。結果としておかしな社会が形成されてしまっているのなら、私達は勇気を持って(そして時には元へ戻るという選択肢も含めて)それを変えていけばいい。そういう風に現代社会を相対化し、柔軟にそして根本的なところからそれを変えていくための勇気と根拠を与えるためのアイテムとして、「歴史」を学ぶことは大きな役に立つ。

第二に、現代社会が抱えている「闇」が、われわれの思っている以上に根が深く、深刻なものであることを認識・実感できるということである。現代社会がいかに非人道的で、ゆがんだ社会であるか、その中で生きる私達にはなかなか見えてこない。特に生まれてきた瞬間からずっとこんな社会が続いている今時の若者たちは、世の中とはまあそういうものなのではないかと考えがちである。ここにはかつての歴史学が果たしてきた負の役割もあって、近代化論をはじめとする多くの進歩系歴史観が、現代こそ人類が到達した最高のステージであって、過去は現在に比べればすべて野蛮だったと規定し、西欧文化を持ち上げてきたという経緯がある。その中で西欧化を果たした日本は最高の成功例とされ、江戸時代は自由の全くない暗黒の身分制社会を持つ劣ったものとして必要以上に描かれた。また現代社会に否定的なまなざしを向けるマルクス主義にしても、とりあえず過去からの発展の最高到達段階が現代資本主義社会であるということまでは一緒で、その矛盾をどう解消し、さらなる理想社会を作るかということに力点を置いている部分が違うだけである。こうし

た近代歴史学の影響もあって、現代では西欧化された資本主義社会は、それ以前の社会よりも優れている、ということになってしまったらしい。(こういう西欧由来の歴史観に日本が染まっているようではどうしようもなく、私達はそろそろ私達の歴史に立脚する独自歴史観の形成に取り組まねばならないと思うのであるが、まあそれはとりあえず置いておくこととしよう。) これでは過去を振り返る意義も薄れ(だからこの手の歴史観は人々に未来へ向かっていく勇気を与えるという意義はあったかもしれないが、過去を研究するという行為の持つ、現代社会への警鐘としての役割をみずから投げ打ってしまったところがあって、歴史が軽視される社会が出来上がったのもむべなるかなと思える)、現代人には明日をどのようにして築いていくかという発想しか残らない。かつては「温故知新」という素晴らしい考えがあったのに。まあそれでも世の中が順調に推移しているのならば、未来だけ見て生きていくという生き方も悪くはない。しかしこれだけ世の中が行き詰っている今日この頃、「闇」は想像以上に深く、これを変えていくとするなら、そうした「闇」が形成された歴史的経緯をしっかりと分析し、過去を変えていく努力をしないとどうにもならない。そのために歴史は大きな役に立つ。

こうした考えに基づき、教養科目として歴史を教えようとするとき、その題材は私の場合自然に明治維新に落ち着いた。明治維新に始まる西欧化・近代化によって、日本はどのような社会からどのような社会に変化したのか、そこで暮らす私たち人間の意識や価値観、行動はどのように変化したのか、それを毎回一話完結でお届けする、そしてそれを聞くことで、歴史について、現代社会について、そしてその中で生きる私たちの毎日について、一人一人に考えてもらう、そのための材料を提供しよう、ということにコンセプトは落ち着いた。それでは全15回の講義内容を紹介しつつ、そうしたコンセプトを私がどのように展開しようとしたかをお伝えしたい。

2. 講義の内容と反応

第1回の講義は私の「皆さん幸せですか？」という問いかけから始まる。まるで新興宗教のようだが、これは現代を歴史的にとらえる第一歩であって、例えば江戸時代に生まれていたら今より幸せだったろうかという問いを投げかけることにより、現代の歴史的な位置づけを考えさせるというところに狙いがある。今どきの若者にとって、歴史は歴史、現在は現在であって、それを比較するという発想自体がほとんどない。だから現在は過去と比較されて検証されることもない。そうした問いかけをすることによって、現在を歴史的に把握させることがこの第一回の狙いである。

確かに現代は豊かで便利である。しかし人の幸せというレベルで考えた場合、私たちは本当に豊かになっているのだろうか。物質的な豊かさと引き換えに何か大切なものを失ってしまっていないか。幕末に日本を訪れたある西洋人が、次のようなことを手記に残している。「日本という国の民衆は世界で一番幸せな人々である。すべての大人は陽気で悩みなく、毎日を楽しんでいる。そしてすべての子供たちは大人から愛され、優しく素直な瞳をしている」と。この記事を読んだ後、街に出てみるとこうした幕末の評価とはかけ離れた人々がそこにいる。通勤で疲れ果てた顔で下を向く大人たち、時に悲惨な待遇を受け、未来に希望の持てない子供たち…なぜ日本はこんな国になってしまったのだろうか。それを知るためのヒントはこれまでの日本の歩みの中にあるのではないか。そう話して第一回は終わる。

第2回のテーマは、「人はなぜ疲れると海を見に行きたくなるのか」である。時間を正確に守るこ

とでは世界に比類なき日本人、しかし明治維新期にイギリスより鉄道技師として招かれたモレルがその手記の中で恐ろしいことを書いている。いわく「日本人は世界で最も時間にルーズな民族だ。誰一人時間を守らない」。なぜこうした評価がなされたのか。そこから江戸時代の時間観念について説明し、江戸時代では時間は二時間単位、分も秒もなかったこと、もちろん時計もなかったこと（例外的に大名時計などはあったが）、にもかかわらずモレルは朝九時に集合という指令をかけ、その時間に人足が集まらなかったことから上記のような評価を下したのだということ、つまりこれは時間をめぐる「文明の衝突」だったのだと話す。そしてこうした二つの時間観念が明治6年に改暦という形で統合され、私たちは西洋時間の中に取り込まれた。しかし突然やってきた分刻みの毎日に適応できず、日本人は時々疲れ果てることがある。そんなときに江戸時代の月のリズムに似た潮の満ち引きをぼーっと眺めていると、体内と外界の時間が一致して楽になるときがある（心理学の一説による）と結ぶ。だから人は疲れると海を見に行きたくなるのかもしれない。「時間」をテーマに、急速な近代化・西欧化がもたらしたものについて考えさせようとした回である。

第3回のテーマは、「スローフードのススメ」である。江戸時代の堆肥を用いた有機農法が栄養価豊かな野菜の生産につながっていたこと、その臭いが幕末維新期に来日した外国人により忌避されたり、また西欧への使節団が下水道を見てこれぞ「文明」と感心したことなどにより、次第に化学合成された肥料に置き替えられていったこと、そうした流れを一気に加速させたのがコレラの流行であったこと、結果として「清潔な国」日本が誕生したものの、私たちの食生活はジャンキーなものばかりになってしまったことを論じ、食文化の視点から近代化の影響について考えさせようとした回である。

第4回のテーマは、「温泉に行こう」である。江戸時代のベストセラーの一つに養生書というものがあること。その多くが「気」の概念に基づく健康法の紹介であったこと。こうした本を読み、健康に人一倍気を遣っていた彼らは「未病」という状態での防御を考え、病気にならないために様々な努力をしていたこと、その一つに銭湯や温泉といった入浴文化があったことを説明する。そして当時の医学では病気になったら死んでしまうため、こうした対処法が編まれたのは事実だが、医学が発達したからといって、とにかく病気になるまで働くのを美德とする現代人の在り方と比べてどちらが正しいのか考えさせようとしている。「健康」という視点から現代と江戸時代の比較を試みた回である。

第5回のテーマは、「人はなぜ就職活動しないといけないのか」。近代に入り、かつての指導者である士族階級が解体され、代替りのエリートを創出するために学歴社会が構築されたこと、その中で人は「何かになるための努力」を強いられるようになったこと、そこから脱落した人の人生は大きく狂っていったことを、大正時代に発生した「虎の門事件」とその犯人難波大助の生涯を追いつつ話している。生まれつき成績が悪く、学歴社会から滑り落ちていった大助が、根はやさしい青年であったにもかかわらず、次第に社会を恨み、その中心にいる皇太子暗殺を謀るに至ったことを説明し、それから100年を経過して、現在もなお学歴社会が生み出すひずみという問題は残り、というよりも拡大しつつあること、そろそろ歴史的に金属疲労に陥りつつある現在の立身出世システムを抜本的に変えていく必要があるのではないかと訴えかけた回である。

第6回のテーマは「鬼はどこへ行ったのか?」。中世までの文学によく登場する「鬼」が、近世期に入り急速に姿を消していったこと、近年歴史学の世界で「鬼」の研究が進み、鬼の多くは実在の人間であったことが明らかにされつつあることなどを紹介しつつ、「鬼」とは何で、なぜ消えていっ

たのかを論じている。網野義彦の名著『無縁・公界・楽』などに基づき、中世までは現在の社会にいられなくなった時、「無縁」の世界に行くという選択肢があり、社会にはそれなりに逃げ場があったこと、それが近世期から近代にかけて奪われ、人々は徹底的に統制されるようになっていったことなどを説明し、近世期以降「鬼」になるという選択肢が失われていったこと、結果的に現代では巷に「鬼」がいなくなった、そしてその代わりに「鬼」は人の心の中に住むようになったのではないかと論じている。前回に引き続き、現代社会の生きづらさと向き合おうとした回である。

第7回のテーマは「どんな女性を美しいと思いますか?」。受講生に、たとえば芸能人だったら誰を美しいと思うか、それはなぜか、などの問いかけを行い、その結果から現在私たちが考える女性の「美」の条件を整理するとともに、近世以前の日本のティピカルな美人像がそれとは大幅に異なっていたことを説明している。「美」という、ある意味で絶対的に思える価値感ですらも、短期間で変化しているということから、変わらないものなんてないのだということを感じさせるために、あえて学生がとても関心を抱いている「美」という題材を取り上げた。そしてそうした変化が、富国強兵政策などの政治的な理由で誘導されていったこと、同時に着物をまとう生活を標準として形成されていた「美」が、ライフスタイルの変化により、新しい「美」へと変化した側面もあることを論じている。

第8回のテーマは「初めてHをした時にお母さんの顔がまともに見られなかったのはなぜ?」。真正面から性の問題を取り上げ、近世から近代にかけて「性」の在り方がどのように変容し、また歴史に対してどのような影響を与えていったのかを論じた回である。江戸時代の「性道書」を史料として用いつつ、近世のセックスが、基本的には男女の思いやりにあふれるものであったこと、また「性」についてオープンに語り合う空間が社会的に広く存在していたことなどを紹介しつつ、近代化の歴史と近代教育の中で「性」はタブー視され、次第に私たちは「性」について「よろしくないもの」というイメージを形成していったこと、それが結果的に人類にとって大事な営みである「性」の問題をゆがめてしまったのではないかと、現代の「性」の問題点を指摘しつつ、江戸から学べることも大いにあるとして歴史の重要性を説いた回である。

以上で前半戦は終了となる。この前半戦は、基本的に近世以前と現代を様々な角度から比較し、現代が必ずしも絶対的に近世以前より優れているというわけではないこと、だからこそ私たちは過去の歴史からいろいろなことを学べるのだということ、人間にとってすべてがプラスになるという選択肢はなくて、例えば日本は西欧型の経済大国を目指したために、近世以前の日本が持っていた人間らしく健康的で、ゆとりのある暮らしを失っていったのだということ、そうした歴史の末に現在があるのだから、過去を振り返ることで現代を相対化し、失われたものの中から大切なものを拾い出していくような視点も大事なのだということ、だから私たちは歴史を学ばねばならないのだということを伝えようとしたのである。

そしてここからの後半戦では、こうした変化(=近代化、西欧化)というものが誰により、なぜ導かれていったのかを論じるとともに、そうして成立した現代社会が抱える様々な問題について、歴史的な題材を取り上げつつ切り込んでいくという、「これでいいのか現代社会?」シリーズを展開している。

第9回のテーマは、「外国人の方が日本を好きな感じがしませんか?」。日本の近代化と西欧化を牽引した「お雇い外国人」について取り上げ、彼らがまだまだ危険な土地だった維新期の日本を訪れてくれたのには様々な理由があったこと、多くのお雇い外国人たちは日本の文化や社会の在り方

に深い興味と共感を抱き、それがゆえに急速な近代化・西欧化に反対した人も多くいたこと、そしてそのために淘汰されていった人も多かったのだということを、コンドル、ベルツ、フェノロサという三人の生きざまを通じて説明した。そしてそうした反対があったのにもかかわらず、急速な西欧化が断行されていったのには別のベクトルがあったとして、次の伊藤博文を扱った回へと誘導している。

第10回のテーマは、「奇跡の人、伊藤博文。もしくはコンプレックスとはかくも恐ろしき」。もともと農民の子であった伊藤博文が初代総理大臣にまで登りつめていったというシンデレラストーリーを紹介しつつ、彼をして徹底的な歴史と伝統と文化の否定、そして一から西欧型の社会を導入するという、一種の文化革命に至らしめたものの背景には、低い身分出身ゆえのコンプレックスがあったのだと論じている。と同時に、伊藤のような存在が日本の頂点に登りつめてしまったことからわかるように、明治維新とは日本人の価値観にコペルニクス的変化をもたらした、まさに文化大革命だったのだと論じた。伊藤がベルツに「私たちには歴史がありません。私たちの国の歴史はたった今始まったところです」と述べたように、日本はそれまでの歴史の全面的な否定から明治国家形成をスタートさせたわけで、その結果出来上がっていった社会の中で、いつしか歴史の重要性は忘れ去られたこと、現代の私たちが世界的にみても素晴らしいところの多い日本の歴史や文化や伝統に今一つ自信を持ってなくなっていったのも、こうした明治維新の性格によるところが大きいのではないかと論じた。近代に入り、日本社会において歴史が重要視されなくなっていったのかはなぜなのかを考えようとした回である。

第11回目のテーマは、「日本人って意外と外国の人に冷たいよね?」。明治5年に起きたマリア・ルーズ号事件について紹介しながら、日本人の持つ島国根性や閉鎖性、外国との関係性において自分からは何もしないと世界から指摘されることの多い、消極性やことなかれ主義が、歴史的な日本の伝統であることを論じ、このままでいいのか考えさせようとした回。日本に寄港したペルーの奴隷船から逃げ出した中国人の奴隷を、日本の外交当局が保護せずに元の持ち主に引き渡してしまったことなどを説明し、日本の人権意識の低さや事なかれ主義がこの頃から存在し、日本の悪いイメージが形成される歴史的な要因になっていることを論じた。

第12回のテーマは、「政党政治は必要なのか?」。戦前期、生まれたての政党政治が早くも危機に陥っていた世相の中で、政党政治の信用を取り戻そうとして内閣総理大臣に就任した浜口雄幸という一人の政治家が数々の難局に立ち向かい、凶弾に倒れるまで文字通り身命をかけて戦ったことを説明した。この時代と酷似していると評されることの多い現代社会。歴史はその後政党政治の崩壊とファシズムへの道を歩むこととなったが、そうした歴史を繰り返さないために必要なことは何かを論じた。浜口は著書の中で、当時の一般市民がすでに数々の汚職事件から、政党政治に見切りを付けつつあることを感じ、それを防ぐのが自分の使命だと述べている。ところが現代の若者も、同様に政党や政治家はどうせ私利私欲で悪いことしか考えていないと諦めつつある。そうではなくて、今一番大事なのは自分の選挙区に浜口のような魂のある政治家がいるのかいないのかを調べ、その人に投票すること、そしてもし本当にそんな政治家がいらないなら、その時は政党政治に代わる良き政治体制を抜本的に検討すべきことなどを論じ、歴史的な視点を持つことにより、世の中を変える大胆な発想が可能なのだと論じた回である。

第13回のテーマは、「日本の裁判制度ってヤバくない?」。司法官のトップである最高裁判所の長官が内閣により選出されてしまうなど、明らかに行政に対して司法が劣勢に置かれ、真の三権分立

が存在していないのはなぜなのかを歴史的に分析した回。明治後期に発生した大津事件とその翌年に起きた司法官弄花事件を題材に、司法権が持つ政治的な影響力の大きさ、それがゆえに司法権をコントロールしやすいものにしようという行政サイドのベクトルが働いていることなどを論じている。裁判官が質量ともに不足している現状や、裁判員制度の導入の背景には、歴史的な司法権の弱さがあることを改めて考えようとした回である。またこの回では史料を用いて歴史の闇に光を射していく過程に若干触れさせることで、学問としての歴史学の面白さや醍醐味を知ってもらうという狙いも込めている。

第14回のテーマは、「ゆとり教育ってこの国に必要なものではないか?」。京都の教育を取り上げ、明治維新で火が消えたようになった京都が、町の再生を子供たちに託すべく教育に地域一丸となって力を注いだこと、明治2年段階で全国に先駆けて先進的な小学校を地域主導で作り上げたこと、その最大の特徴として、教育方針を学校サイドと地域住民との間で議論して決めるべく、「総合的学習の時間」が設けられていたこと、京都の場合、未来に必要な人材は、芸術的センスのある子供であるとして、美術や音楽などにその時間の多くが充てられていたことなどを説明し、こうした特色ある学校教育を背景に、京都の小学校からは次々と芸術家が誕生したこと、それゆえやがて文部省により全国画一的な教育が施行されていく中でも、京都はそれに反逆し、唯一オリジナルな美術教育を展開したという事実を通じて、実はこういう特色ある教育を展開できれば、ゆとり教育にも意味があったのではないかと論じた。この回はゆとり教育の中で育ち、「これだからゆとりは…」などの形でパッシングされることの多い今どきの大学生に、エールを送る意味も込めている。

そして最終回は、これまでの講義を踏まえつつ、もう一度いま私たちがいる位置を確認しようと試みている。近代から現代にかけての西洋由来の歴史観が、ほとんど西欧を頂点とする「文明」の「発展」「進歩」の歴史観であること（これについてはさらなる「進化」を目指そうとするマルクス主義歴史学も含まれる）、そして日本もそれに巻き込まれつつ近代化、西欧化を進めてきたこと（その結果として歴史が軽視される社会が誕生してしまったこと）、一方でアジア固有の歴史観は、循環型であり、むしろ「文明」の「発展」「進歩」は社会の墮落と腐敗を生み、やがては崩壊に至るという「文明」への警鐘の要素を多く含んでいることなどを説明し、西欧型の経済発展、そしてそれを達成したものが弱者を支配するという19～20世紀の世界システムが、現在では否定されつつあること、文明間の理解と共生こそが現代の世界で重要視されていること、だからこそ私たちも「富と力」こそがすべてという価値観から脱却し、それを目指してきたこれまでの歴史の中で零れ落ちてきた大事なものに目を向けるときが来ているのではないかと論じ、まとめとしている。

おわりに

この「歴史観の形成」という授業は、ある歴史観を形成するものではないと銘打って始めている。しかしながら最終的には、担当者である私の歴史観を前面に押し出す形をとった。学生たちにいろいろと考えてもらうためには、従来にない新しい歴史観をおつけてみた方が効果的ではないかと思っただけである。私は西洋由来の「文明発展史観」と、それに巻き込まれつつ近代化・西欧化に奔走し続けた、これまでの日本社会の歩みがあまり好きではない。確かに歴史的に見た場合、そうした方向性を日本が採用し推進したことには、少なからず仕方のない面があり、古来より続く、そ

うしなければ他のアジア諸国と同じように植民地になっていたのではないかという議論にも一定以上の理解を示している。ただそれはそれとして、単純な経済発展がもはや望めない現代において、なお我が国が欧米由来の経済発展志向を取り続けることにはさほど意味を見出すことができない。むしろ発展に陰りが出てきた今だからこそ、これまでの歴史の歩みを総点検し、失ったもの、得たものを精査したうえで、より人間が人間らしく生きることのできる、安全で潤いのある、成熟した社会をどのように生み出していくかを考えることこそが、従来のモデルに代わる新たな「文明」社会の構築に他ならないと考えている。こうした歴史観に基づく講義は学生たちにはかなり新鮮だったようで、毎回の感想用紙には様々な反応がちりばめられ、私にとって貴重な意見が少なくなかった。熱心に受講し、たくさんの意見を書いてくれた学生諸君に感謝の意を表し、この講義実践の紹介を終わりとしたい。

付記：本論文は、昨年突然の病により逝去された故河角教授追悼のために書き下ろしたものである。河角教授は研究もさることながら、誰よりも教育熱心で生徒思いの先生でおられた。今、京都学専攻の一員として教学に従事する中で、先生が作り上げられた様々なプログラムの素晴らしさを実感するとともに、それを作り上げられた苦勞に思いをはせる毎日である。私もより良い教育を行うことで、先生には安心して休んでいただけるよう努力したいと思っている。そんな思いを込め、教育実践についての論文を認めることにした、ということも蛇足ながら付記しておきたい。

(本学文学部教授)